

濁水かわら版

第73号 2018年12月26日

日本の戦争 21 支那事変シリーズ

ボケ防止を兼ねて 中安 宏規

水と兵隊 11

図A 「水と兵隊」を再開します。前回の第10は、輸送船が中国軍の攻撃を受け、従軍記者6名と船員などが戦死した話でした。

戦死記者の氏名判明

今回は、船を1日修理し九江へ向かう船中の話です。安慶出航日を(1938年)10月2日と伏せ字でなく明記。戦場へ向かう同乗した部隊との別れのひと時を過ごしたようです。下の図Bの□を見て下さい。



水と兵隊

中庵 尙位
白井 秀風 畫

一、江上ビルで別れの駈盆

船體修理の爲めに一日を安慶沖に休んだ私達を乗せた軍用船〇〇丸は早朝安慶を出港した、それは十月二日のことである。昨日晝過ぎから降り出した雨は未だ降り続けて居た、私は寢臺の上に横になつたまゝ丸窓から窓外を見て居た、軍艦出雲が二、三の驅逐艦と共に私達を見送つて居る、船は次第々々に速力を増し、九江へ〜と急いだ。その夜過く九江沖へ投錨することが出来た、漢口攻略戦に参加する陸の兵は皆九江へ上陸して徒歩で或は小舟で或は自動車で思ひ〜の方法で第一線へ向ふのである。

南京から乗船して丸四日共に暮した堀〇部隊の將校達と明日の朝は別れなければならない、何んとなく淋しいやうな気がする、私はビールを半打程持つて居た、私はそのビールを持つて堀〇部隊の將校達の休憩室へ行つた、碁を打つたり將棋をさしたりして居た將校達は私はまだ何にも言はないのに軍装をして居る私を見て皆私の方へ向つて立ち不動の姿勢で私を迎へた。私も又不動の姿勢で一禮をした後、

〇〇部隊中庵少尉御挨拶を申し上げます。
中庵少尉は明早朝九江に上陸の豫定であります、南京に於いて乗船以來公私共に格別の御指導に預りまして厚く御禮を申し上げます、戦場に於いて再會の機會のあることを望んで止みませんが、各官には大いに力戰奮闘せられまして第一番の勳功をお建てになられますやう併せて各官の武運の長久をお祈りして止みません、甚だ簡單であり

ますが、これを以てお別れの御挨拶と致します。をばり！
私の型のやうな軍隊式の挨拶が終ると、堀〇部隊の肩の大きな先任中尉が、妙な手つきで愛嬌のある顔で中庵さんあなたのお腰の刀を借して頂戴だい、云ふまでもなく私の刀で軍装して挨拶をしやうと云ふのだ、私が出ひながら刀をはずして渡したら、謝々と云ひながら腰に着けると、不動の姿勢で私に一禮し、堀〇部隊の將校一同を代表して……の言葉と共に皆不動の姿勢になつて居た。



〇部隊の將校を代表して一言御挨拶を申し上げます、只今は御懇篤なる御挨拶をいたさしまして恐縮いたしました、小官等は中庵隊長の武運長久を祈つて止みません、簡單ながら御挨拶にかへます。をば

3 15年戦争で斃れた従軍記者の全貌を把握せず、手元の資料でお茶を濁すは恥!! 記録の検索を続けた結果、従軍記者史を見つけた自転車操業のお粗末さです。
4 同書によれば、満州事変(1931/9/18~33/5/31日:塘沽協定で停戦)の従軍記者の犠牲者は5人であった。支那事変(37/7/7~41/12/8)は、戦闘が長期にわたった。殉職者は、成都事件で(暴徒に撲殺された)毎日の渡辺洸三郎記者(注:毎日は遭難殉職と認定)を除き41名に達した。→次頁へ

4	1	11	9	同	6	4	同	3
21	31	30	30	同	22	16	同	10
同	朝	同	台湾日日	同	読	秋田魁	同	朝
同	日	盟	日	盟	売	菅生伝之進	同	日
武田 正次	鈴木高之助	花房末太郎	松田 務	下津 久男	若月雄三郎	見須 慎一	内野 一三	福岡飛行場
海南 島	千葉(帰還後戦病死)	広東省珠江	九 江	同	揚 子 江	山西省武鄉	同	

出典「日本戦争外史 従軍記者」360頁より

1 図Bは全日本新聞連盟編「日本戦争外史・従軍記者」(1965年・新聞時代社刊:以下「従軍記者史」)の360頁。□内を解説すると、「昭和13(1938)年9月30日、台湾日日新聞の松田務記者が、九江で戦死」。中庵尙位は内地と台湾から派遣記者と記し、今回「1日修理して10/2日出航」と書いている。逆算すると、同船の従軍記者らが戦死したのは9/30

日だ。戦死の地は九江で安慶でない。他の5人は? 考えられるのは、全員が重傷を負い「ダメだ」と伝わるも、治療で5人は一命をとりとめたか? 死亡の認定は軍医が行い所属する社へ通報する。他は助かった可能性もある。
2 □の秋田 魁の菅生記者は、敵弾にたおれ衛生隊にかつぎこまれて、なお戦況原稿をしたためた。その末尾は「…我は職務のために斃れんも、死に至るまで責務を全うせり。皇軍の万歳を叫んで斃れん。出血多量、記す能わず」と、従軍記者史は伝える。

無慈悲な戦争で散った多くの新聞社員

⑤ 図Cは、従軍記者史を基に4年余の支那事変で犠牲者を出した新聞・通信社10社41人をまとめた。

図C 支那事変の死亡従軍記者数

朝日新聞	16	秋田魁	1
毎日新聞	8	東奥日報	1
読売新聞	6	名古屋新聞	1
同盟通信	5	台湾日日	1
福岡日日	1	満州通信	1

地方紙は、郷土部隊の戦場を伝えるために従軍記者を派遣した。前頁②秋田魁の菅生記者のように死の直前まで書き続けたようである。

図D 太平洋戦争の死亡記者数

	従軍記者史	私	シベリア
同盟通信	55	56	0/1
朝日新聞	52	47	0/1
毎日新聞	52	66	2/2
NHK	39	39	
読売新聞	38	38	0/1
東京新聞	4	4	
西日本新聞	1	1	
北海道新聞			4/8
計	241	251	6/13

⑥ 図Dは、太平洋戦争での従軍記者の報道機関別の犠牲者である。NHKは初顔だ。左欄は従軍記者史が伝える人数だが、念のためが一覧表を精査したのが「私」青数字欄で10人多かった。

⑦ 右のシベリア欄は、従軍記者史の「ソ連抑留の犠牲者」の記事からカラフトに支社・支局があった報道機関の状況を抜き出した。分母はソ連に検挙され、スパイ罪などで死刑・強制労働の判決を受けた人数。分子はシベリアで他界した人数である。

銃殺刑の北海道新聞(以下道新)の支社長は自殺を考えたが、強制労働20年の毎日の支局長から「もう少し様子を見よう」と言われ思い止まった。その2か月後モスクワから銃殺執行の命令書が届いた。直後に刑法改正で銃殺刑が廃止となり、25年の経緯に変更。1956/10月、鳩山首相が訪日し日ソ修好宣言で国交が回復。道新の支社長ら7名(分母-分子)が帰国した。毎日・道新の分子6名中5名は

り。
お互の挨拶が終わったので私は室の外にビールを持って待つておる。桑木と云ふ上等兵を呼んだ。桑木上等兵が持ち込んだ六本のビールを見て「一本は桑木お前飲め」と云ふのを忘れて居たことに気がついた。私は静かに桑木上等兵に云つた。桑木駄目ぢやないか。お前達が無茶飲みをするときはどうでもいゝが、敢て縁起を昇ぐわけではないが、乾盃とか、その他御目出たい場合には少し気をつけなければいけないよ。昔から六と云ふ数字は「ロクデモナイ」と云つて人から嫌はれるのだ。その代り七、五、三と云つて此の数はお目出度としてあるんだ。だから六本しかなくつたら、一本買ふかどうかして七本にするか、一本減して五本にして持つて来なければ駄目だよ。俺はよいが多数の人の場合には気をつけなければいけないよ。これから気をつけてくれ。一本は持つて歸つてくれ。桑木上等兵は變な顔つきをして私の云ふことをだまつて聞いて居たが、私の好きな例のカイゼル髯の老准尉がナニニ大夫だ、六本のビールを飲んで弾はあたりやせん、オイ上等兵心配するな。その一本は俺が飲んでやる。正に立ちあがらんとしておるので、私は一本のビールを桑木上等兵に押しつけて室の外へ出してしまつた。桑木上等兵の力ない靴音が消えていつた。
堀〇部隊の將校達も二本、三本と持ちよつて飲み始めた。何れも藁の者揃ひで二十本餘りを忽ち飲み盡したので、私はいゝ気持ちになつて私の室へ歸つて来た。桑木上等兵は明日早朝上陸と云ふので私の行李を整理してくれて居た。彼は私を見るも、隊長殿先刻は済みまん、と云ふのであつた。本當に濟ない様な顔をして居た。私は本當に濟ないやうな顔をしておる桑木上等兵の顔を見て罪なことをしたと思つて

もどうしやうもなかつた。私は桑木上等兵に向つて桑木、君も血の廻りの悪い男だな、と云つたら、桑木上等兵は私の前に不動の姿勢でオド／＼して居るではないか、私はそれを見て氣の毒になつた。私は此の時兵は三十になつてもやつぱり初年兵と同じだと思つて、桑木あれば君が悪いのぢやないのだ、俺が悪かつたのだ、あの時歸つて飲め、と云つて一本君にあつさり渡せばよかつたものを、君にやると云ふのを忘れて居たことをあの時気がついて、一本抜き取るのにあんな智慧を出したのだが不味い智慧だつたよ。そんなわけだ、あのビールはどこにある、と云つたら、桑木上等兵は桑木はとて心配しました。とニコ／＼笑ひながら行李の中へビールを取り出した。そして彼はまゝ一杯と私について来てから、さも美味そうに私の傍で喉を鳴しながら飲んだ。そして桑木上等兵は潤んだ目を私の膝の上に注ぎながら隊長殿、桑木は水には弱いですが、陸に上つたら千人力ですよ、隊長には軍刀以外には何にも持たせませんが、彼が支那灘から船量したことを思ひ出してひどく責任を感じて居るやうであつた。
その時ソックもせすにそつと顔を出した者があつた、それは老軍曹漆谷であつた。彼も又アルコル組では相當な者で、桑木上等兵の顔をしげ／＼と見ながら、うまくやつてゐるな、俺にも一ぱいくれ、と云ひながら私の傍にあつた。コップを取つた、私は少しばかり残つておるビールを漆谷軍曹についてやつた。老軍曹は嬉しそうに私の顔とコップとを見つめて居た。ビールはやつと一ぱいあつた。老軍曹はそれを一ぺんにぐつと飲みほしてから一度すぼめた胸を一ぺんに大きく張つて呼吸をした。その時外からソックする者があつた、私が押したベルでボーイが来たのであつた、私はビール三本を命じた、そして漆

谷に云つた漆谷中から鍵を掛けて飲め又次の漆谷が来ると五月蝋いからと云ひすて三本のビールを見ないで、床の中にもぐり込んだ。
間もなくボーイがビールを持って来た。漆谷軍曹が「隊長殿御馳走になります」と云ふのが聞えたが私はそれは何とも答へなかつた。それは悪意でもなんでもなかつたのだ、寝つて居れば彼等が何の遠慮もなく三本のビールを落し付けて飲むであらうと思つたからであつた。
シユウとビールの口を抜いたやうである、二人が美味そうに飲んで居るのが聞える、それからホン／＼暫くしてから又ソックする者がある。その聲は三上軍曹のやうだ、それを漆谷軍曹も桑木上等兵もよく知つて居る。一杯飲むと漆谷軍曹は俺が三上より古参軍曹だと云ひ、三上は三上で俺が漆谷より古参軍曹だと張合ふ仲で、南京の私の旅館の一室で私と三人が飲みながら私を手子摺らしたことがあつた。けれ共二人共流石に四十を越して居るだけに仲々面白い、そして軍隊教育を完全を受けて居るだけに萬事が氣持のよい二人であつた。
「隊長は今居られないよ」と云ふのが漆谷軍曹であつた、「ア、又漆谷に先手を打たれたナ」と云ふ三上軍曹の聲が外からはつきり聞える。桑木上等兵が鍵をはづして居るらしい。何んか二人が隊長殿は？ 君等うまくやつておるな、俺は藁の間に隊長が六本ビールを持つておられるのを知つて居たんだ、明日上陸だらう、モウ隊長はいいまいから今貰ひに来たんだ、又漆谷にやられた。桑木コップはないか、と三上軍曹が大きなドラで面白そうにしやべり立てて居る。
村會議員の軍曹殿も漆谷にはかなふまい、全くだ運送屋の軍曹だ運ぶことが早いよ、二人が大口を開いて笑つた、そして二人の「今日は古参争ひをやるまいで」と云ふ聲が聞えた。

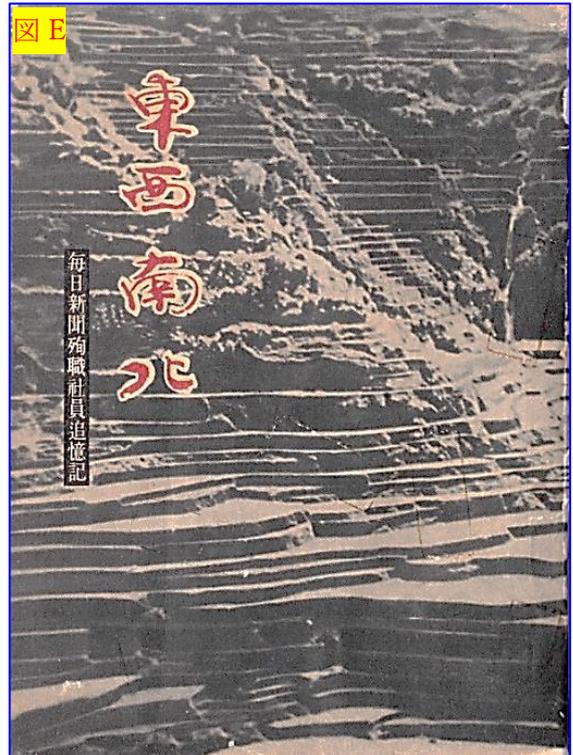
病死。道新の1名は、伐木作業の強制労働中、倒れて来た木を避けて走った地点が、警戒線を越えたため、即座に銃殺された。→次頁へ

支那事変以降を総括した「東西南北」

(前頁より 図 D シベリア欄続き) 1945/8/06 日、ソ連が日本に宣戦布告、ソ連軍は北緯 50 度線(国境)を越えなだれ込み、島民は大混乱となった。その 2 か月前、日本新聞会は決戦体制に應えるため島外報道社に撤収を指示した。だが地元紙は「カラフト新聞」のみで、道新の引き上げに反対した。唯一の電話線は軍優先。道新は支社に「新聞人の使命を全うするため、島民全部の引揚げ終了まで現地で頑張れ。但し樺太長官の指示あれば、社命が無くとも引揚げよ」と指示した。それは 8/25 日の事で北海道との連絡船は 8/22 日で航行を中止していた。ソ連軍は樺太新聞を接收し「新生命」という宣伝紙を発行、同盟通信を含む島外紙 5 社に協力を求めた。5 社は「日本の記者の誇りを捨てソ連の手先になれない」と決意、断った。ソ連軍は、居残りはスパイが目的と判断。検挙した 13 人を軍事裁判でスパイ罪と国家転覆罪で有罪とし、シベリアへ移送した。(従軍記者史より)

⑧ 図 E は、支那事変以降の戦場で斃れた記者やカメラマン、補助社員と新聞社の状況を総括した『東西南北—毎日新聞殉職社員追憶記』の表紙です。各社の社史は、従軍記者を簡潔に記述している。満州事変からポツダム宣言受諾(敗戦)、敗戦後の従軍記者や現地新聞出向者の動向・戦死状況・帰国に至る経緯を総括した冊子は無いと思っていた。ところが今回、私が 35 年の記者生活を送った毎日新聞社が敗戦から 7 年後の 1952 年 4 月、遺族向けに 350 頁に及ぶ同書を非売品で刊行していた事を知った。恥ずかしながら古書店で入手、その内容を紹介します。

表紙は餓死者が多かったルソン島山岳部の景観写真。題字は聖徳太子筆「法華経義疏」(注:義疏は注釈書の注釈書)からの集字とある。敗戦時、資本金 1000 万円の同社は、500 万円を海外で斃れた社員の状況把握、遺族への償いや生還者の給与の支払いに充てたと記している。



⑨ 図 F の表は、毎日新聞社が満州事変以降、支那事変と太平洋戦争の戦場に社員送った記録。「東日 70 年史」と「東西南北」の記事から抜き出し作成した。

⑩ 図 G は 45 年 8 月 15 日の敗戦時点の海外派遣社員 469 名(殉職を含む)の地域別人数である。カラフト・千島 5 名のうち豊原支局長太田原吉里、敷香駐在磯崎安雄は、進駐してきたソ連軍に検挙され、スパイ罪で強制労働 20 年、同 10 年の刑を受け、シベリアに移送され日ソ国交回復前に病死。他は戦死・戦病死・阿波丸遭難。(次号へ)

図 F 毎日新聞社が戦場に派遣した記者など社員数		図 G 毎日終戦時の地域別在留社員数		左の内死亡
満州事変	錦州に 50 名余派遣 (東日 70 年史)	樺太・千島	5	
支那事変～敗戦	中国戦線の従軍特派員(大阪人事部資料) 華北 213 名 華中 307 名 華南 83 名 海軍関係 54 名、計 657 名。終戦直前の記録なし。(東西南北)	朝鮮	31	2
1938 年度～39 年度	中国戦線 上期のべ 269 名 下期のべ 418 名 同 39 年度上期同 570 名 下期同 628 名 総計 1905 名(東日 70 年史)	満州	21	1
1940 年 10 月～	蒙古～タイ～仏領印度支那へ常駐特派員約 100 名、従軍特派員 70 余名派遣 (東西南北)	中国華北	14	
1941 年太平洋戦争宣戦布告直後	ホンコン 10 名 タイ 15 名 マレー方面 10 名 フィリピン 15 名 オランダ領印度支那 25 名 仏領印度支那 25 名 華南 20 名 計 120 名。連絡員 50 余名で総計 170 名余を戦時派遣。(東西南北)	同 華中	23	
42/2/15 日	シンガポール陥落→3/10 日 昭南(シンガポール)支局開設 支局長以下 10 余名 (東西南北)	同 華南	22	
43/3 月	入退社を除く異動 138 件中、内外地間異動 77 件(58%)	台湾	26	
45/8 月の終戦時の状況	外地派遣社員 342 名(殉職を含む)。現地採用の南方新聞社員・連絡員 127 名の計 469 名に及ぶ。(東西南北)	沖縄	2	1
		マレー ビルマ	25	2
		フィリピン	144	6
		ジャワ スマトラ	94	
		その他の戦地	46	
		欧州特派員	6	
		計	469	14